さらに，第4章では，経済発展による農村労働力の流出と水利制度の変更による水利費の上昇という与件変化に対し，希少となった水資源を節約する方向に制度が変化するという誘発的制度変化仮説を検証している。誘発的制度変化は動態的な現象であり，その実証のためには，本来，水利制度，圃場特性，家計特性などに関する時系列の情報が必要であるが，長期のデータを収集するには，膨大な時間と費用が必要となる。ここでは，そのような問題を回避するために，各水利組合ごとに水利費が異なり，しかも，水利費は無作為に決定されているという事実に着目し，67の水利組合における一時点（横断面）での水利費を昇順に並べ替え，それを時系列でみた水利費の上昇と見なすことにより，水価格と各農家が選択した水利制度との間の変化を関連付け，誘発的制度変化仮説を検証している。この革新的アイデアによって，従来，データが入手困難であったがゆえに実証が困難であった動態的な現象に関する仮説を，時間と費用を節約するために横断面データにより検証したことは，評価されるべき成果である。

これ以外にも，実証研究のためのアイデアが随所に散りばめられ，分析結果はいずれも学問的に価値の高いものである。

むろん，評者として疑問点が無いわけではない。

たとえば，第3章で，灌漑地域と天水田地域における農民の社会関係資本を比較しているが，このような比較が統計学的に正当化されるためには，両地域の農民の特性や社会構造に差異が無いという条件が満たされていなければならない。しかし，ここでは二つの地域が地理的に近いという説明のみで，農民やコミュニティーの類似性についての具体的説明はなされていない。

また，各章で計量経済学的な実証分析に用いられた標本家計の数は少なく，得られた分析結果の統計学的信頼度に不安が残るし，調査地域が限定されている場合，分析結果の外的妥当性（External validity）は保証されない。

さらに，第5章で，収量，利潤，所得，消費額などを被説明変数とし内生性が疑われる井戸やタンクの使用状況などを説明変数とした計量モデルを推計する際に，操作変数法を使って推計している。しかし，操作変数法を用いる場合，用いた操作変数が適切であり因果関係を示していること（Internal validity）を検定する必要があるのだが，灌漑状況を表す変数が複数の場合に本書で用いた1変数の場合の検定方法で問題はないのか，疑問である。

以上のような疑問は残るものの，各章の内容は質が高く，明らかにされた知見はいずれも新規性があり学問的な意義が大きいことから，本書の価値に比べれば評者の疑問など些細なものかもしれない。

いずれにせよ，本書を，日本の開発経済学・農業経済学の境界領域分野において今後の研究を行うに当たっての里程標となるべき好著と評して間違いはなく，多くの読者に読まれることを期待したい。

（福井清一・大阪産業大学経済学部）

赤木　攻.『タイのかたち』めこん，2019，312p.

本書は，長年にわたり日本のタイ研究を牽引してきた著者が，タイ王国の成り立ちについて，歴史，政治，文化，言語など多様な側面から新たな解釈を試みた挑戦的な作品である。著者は，本書の冒頭で「タイにはタイ人はいない」という刺激的な問いを提示する（p. 3）。タイという国は，14世紀に誕生したアユッタヤー王朝以来，外からやってきた様々な人々がつくった「外来人国家」であり，元来そこには王権とタイ語および仏教を除けば，今日タイ文化と呼ばれるものはほとんど存在しなかったと主張する（p. 4）。そして本書では，「タイ人がいないタイ」という国家がどのようにして生まれ，どのような特徴を備えているのか探っていく旨が述べられる。本書の構成は以下のとおりである。

序　章　タイにはタイ人はいない
第1章　地政学的背景
第2章　「スコータイ神話」

第3章　三つの世界
第4章　「チャート・タイ」の創出
第5章　現代タイの葛藤
終　章　新しい「チャート・タイ」を求めて

第1章では，タイの地政学的背景について簡潔に確認がなされる。タイに関する地政学的要点としては，(1) タイが位置するインドシナ半島は「ほどほどに豊かな自然」に恵まれていたものの，マラリアなどの疫病をはじめとする風土病が存在するため人口の増加が抑制されてきたこと，小人口から来る慢性的労働力不足は，古くからこの地域の統治者を悩ませてきた問題であること，(2) インドシナ半島は，海路および陸路でもヒトやモノが往来する交差点であり，古来よりヒトの流動性が高い地域であったこと，(3) 現在のタイ国の領域で使用される言語が多様であり，タイは過去から現在まで一貫してきわめて多様な民族を抱えてきたこと，以上3点が指摘される。

第2章では，タイの歴史がスコータイ王朝から始まるとする言説について検証がなされる。タイの「公定ヒストリー」によると，「スコータイ」はタイ族最初の国家であり，敬愛で結ばれた国王と臣下・人民の関係は親子関係のようであり，平和で豊かなタイの「理想郷」とされる。しかし著者は，「スコータイ」が誕生したのは，スコータイ王朝が滅んで約五百年を経過した20世紀はじめであると断じる。そしてスコータイ王朝は存在し繁栄したものの，現在のタイ国家の直接的起源ではないことを強調する。19世紀末に起きたフランスによるチャオプラヤー河口封鎖と領土割譲要求という国家的「危機」の克服，そして20世紀初頭に即位したラーマ6世王による「タイ国民（民族）の創生」の試みにより「公定ナショナリズム」が生み出され，そこにおいて「スコータイ」の国王と臣民との関係が理想化されたのだと述べる。更に1932年の人民党革命後は，軍部が政治権力を掌握することを正当化するために，国王は「神王」ではなく，「スコータイ」の国王のような「偉大なる人」であるべきだとの論理の展開がなされ，「スコータイ」の昇華が行われたのだと主張する。

続く第3章では，タイ国は本来一体ではなく，異なる民族や異なる文化を持った地域が統合された結果であるとして，「サヤーム世界」「タイ世界」「マレー世界」の3つの世界に分けて，各世界の特徴について論じる。最も多くの紙面が割かれているのが，「サヤーム世界」である。著者は，「サヤーム世界」こそが，現在のタイ国家の形成主体または形成基盤となった世界であると主張する。具体的には14世紀から18世紀まで存続したアユッタヤー王朝を中心とした世界を指す。アユッタヤー王朝は交易によって繁栄した「港市国家」として知られるが，交易システムの重要部分を担い，莫大な富を築いたのは「外来人」およびその子孫たちであった。特殊能力を持つ「外来人」たちは高級官僚に取り立てられ，王位継承・争奪戦においても重要な役割を果たしたとされる。

本章の「サヤーム世界」に関する指摘で興味深いのは，第1節「サヤーム世界／外来人国家」の後半で触れられる「サヤーム世界」の中に受け継がれているタイ的要素に関する部分である。著者は，スコータイ王朝は姻戚関係を通じてアユッタヤー王朝に吸収された，もしくはスコータイ王朝がアユッタヤー王朝を乗っ取ったのだと主張する。また，アユッタヤーに先行して小規模のタイ族からなるクニ「アヨータヤー」が存在し，タイ的要素として王族の血統，言語（タイ語），宗教（仏教，バラモン教）がアユッタヤー王朝に継承されたと指摘する。

2つ目の「タイ世界」は，具体的にはタイの東北部や北部の地域に多数存在したクニ「ムアン」を指すとする。「タイ世界」は，身分制を通じて「サヤーム世界」により間接的に統治されたが，時として民衆が反乱を起こすこともあった。著者は，民衆反乱の背景には，「民族（部族）意識」があったと主張する。「サヤーム世界」がタイ族やラーオ族といった原住民を包摂していく過程で，彼らは自民族の独立性を維持するために反乱を起こしたのだと述べる。

3つ目の「マレー世界」は，南部のマレー半島の地域を指す。南部の中心地であるパッタニーは地方の重要な交易ネットワークの一角を占めて栄えた。パッタニーはイスラム教学の中心地であり，「サヤーム世界」の身分制もほとんど機能していな

かった可能性が高く，「サヤーム世界」とは即かず離れずの関係を保っていたとされる。

第4章では，19世紀以降，「サヤーム世界」が「タイ世界」と「マレー世界」を包摂しながら，近代国民国家「タイ国」を形成していく過程について検討が行われる。著者は，タイ近代国民国家の形成のために実施された「チャクリー改革」は，王権主導による「タイ化」であり，「サヤーム世界」における「外来人国家性」からの脱皮であったとの見解を示す。そして「タイ化」とは「タイ的価値」の創出であり，その中心に位置するのは王権であると指摘する。歴史的にはアユッタヤー王朝を中心とする「サヤーム世界」で醸成された王権思想は，チャクリー改革の過程でタイ化され，「スコータイ」王朝の王を範とする慈父思想が定着した。

加えて，タイ国の文化的基盤として創出されたのが「チャート・タイ＝タイ的価値」であったと述べる。著者は，「サヤーム世界」が国民国家創出の上でもっとも苦労したのは，「国民」であったと指摘する。なぜなら，きわめて多様な住民をまとめ，「タイ国民の創出」をすることが必要であったためである。著者はそれを「民族のないところに民族を創り，さらに国民に仕立て上げる作業」であったと断じる（p. 172）。そして「タイ国民の創出」とは「タイ文化の創出」であり，タイ的個性を備えた価値体系の構築であったと指摘する。ここで中心となったのは，王権の強化，そして王権と仏教のブン（徳）思想との連結であった。また生活文化におけるタイ的要素の取り込みも重視された。その手法は，主に「タイ世界」から多くの文化を「サヤーム世界」に取り込み，取り込んだタイ的要素がいかにも以前から「サヤーム世界」に存在していたかのように扱い，国民国家の代表的文化として位置づけることであった。著者は，このような試みにより形成されたタイ国家を「借景国家」と呼ぶ（p. 176）。

第5章では，時間軸を近代から現代に移す。1932年立憲革命から現在に至るまでの期間を取り上げ，「タイ化」の進展が図られた過程について検証がなされる。時代によって「タイ化」において重視される要素は変化しており，ピブーンの時代には「民族」が強調され，サリットの時代には「王権」の強化や「仏教」への国家の介入が行われ，教育が重視されたことなどが指摘される。これらに加えて著者は，タイ語が果たした役割についても重要視する。アユッタヤー時代には，タイ語は支配的な言語とはいえず，主に王宮の中で使用されている言語であった。国民国家形成の過程でタイ語の重要性が認識され，印刷技術の発展や教育の普及とともに徐々に広く社会に浸透していった。

しかし同時に著者は，現代のタイ社会に依然として強い影響を与え続ける「外来人国家性」についても指摘する。歴史的に商業活動に従事する外来人が多かったことが，商業主義，営利主義，「コネ」重視の人間関係，汚職の頻発，集団の凝集性の低さといったタイ社会の特徴を生み出したとされる。加えて，「サヤーム世界」で育った身分制のようなものが，目には見えないかたちで，しかし確実に現在のタイ社会を支配していると指摘する。

終章では，近年のタイ政治を巡る混乱の背景には，タイの「外来人国家性」に由来する社会的特徴により引き起こされた問題が存在することについて指摘される。そして最後に，タイの知識人や政治家は「三つの世界」に橋を架けることができるような新しい「チャート・タイ」とそれに向けた国造りの設計図（理念）を国民に提示する責任があるとの意見を表明し，本書を結んでいる。以上が本書の内容である。

本書の内容の紹介はここまでとして，次に論評に入りたい。本書は，タイの国民国家形成の歴史を主題とするが，近代までの政治史のみならず，現代政治が抱える諸問題を分析する上でも重要な示唆を与えてくれる好著である。本書が提示する「タイ人とは何か」「タイにはタイ人はいない」という問題意識は，近年，タイ人自身の間でも広く語られるようになったテーマでもある。評者がタイで現地調査を行っていた際にも，タイ人たちから「タイ人って何かしら？ タイの人々は，華人，インド人，カンボジア人，そして日本人などの血が混じっている人ばかりよ」と問いかけられることが幾度かあった。背景には，2006年頃から現在まで続く「バンコクvs東北部・北部」の地域間闘争，または「既得権益層vs地方農村部住民」の階級間闘争が影響を与えていると考えられる。

タイの国民国家形成に関する代表的な研究としては，トンチャイ・ウィニッチャクンの*Siam Mapped*［1994］があげられる。トンチャイは，「地理的身体」（geo-body）という概念を使用して近代の国民国家形成を検証し，「シャム」[1] が言説としての構築物であったことを示した。同書では，「タイらしさ」を明確にするために，他者性の創出，とくに敵の創出が行われたこと，「地理的身体」が敵の創出に大きな役割を果たしたことに焦点をあてた。これに対して本書は，タイ国内における「サヤーム世界」「タイ世界」「マレー世界」の3つ世界，特に最初の2つの世界の間のせめぎあいについて着目し，国民国家形成について論じた点が興味深い。

アユッタヤーを起源とする「外来人国家」である「サヤーム世界」が「タイ世界」の文化を取り込み，長い時間をかけてタイ国を構築中であるという説明は，一定の説得力を持つように思われる。しかし，議論を子細に検証してみると，いくつかの疑問点も浮かび上がる。「サヤーム世界」の外来人国家性と「マレー世界」の独自性については丁寧に論じられており，これらの点については学術的にも妥当性があると思われる。

更なる検討が必要だと思われるのが，「タイ世界」に関する記述であろう。著者は「タイ人らしさ」が，近代の国民国家形成期以降に創出されたものであると論じる一方で，スコータイ，アユッタヤー，そして周辺の小さいクニの中に，核となるタイ的要素を探し出そうと試みている。しかし例えば，アユッタヤー朝において「外来人」も歯向かうことができなかったとされる強大な王権とそれを支えた王統は，外来人的要素なのか，それともタイ的要素の核といえるのか。また王宮を中心とする一部で使用されているに過ぎなかったタイ語は，タイ的要素といえるのか。加えて，「タイ世界」では東北部と北部のムアンが取り上げられているが，タイにおける民族構成や使用言語の分布が非常に複雑であることが知られている。果たしてこれらを同じ「タイ的要素」として一からげにすることが妥当であるのだろうか。そもそも「タイ」とは何を指すのであろうか。タイ民族に関する言語学的見地からの研究として，チット・プーミサックの『タイ族の歴史』［1992年，坂本比奈子訳］が存在するが，同作品の中でも「タイ」（thai）という言葉の意味が時代とともに変化発展してきたことが指摘されている。曖昧で捉えどころのない「タイ」は，真に実体があるものとして描くことができるのか否か，更なる検討が必要だと思われる。

以上，幾つかの疑問点をあげたが，著者の豊富な知見に基づく本書の議論は大変刺激的である。タイ歴史研究のみならず，政治や文化の研究においても多くの学術的な示唆を与えてくれる。今後のタイ研究の進展に大きな貢献が期待される作品といえよう。

（外山文子・筑波大学人文社会系）

1) タイの昔の国名。1939年にシャムからタイに変更された。

参考文献

Cit Phumisak. 1976. *Khwam pen ma khong Khwam Sayam Thai Lao le Khom le Laksana thang Sangkhom chu Chonchat*. Bangkok: Munnithi Khrongkan Tamra Sangkhomsat lae Manutsayasat.（チット・プーミサック．1992.『タイ族の歴史――民族名の起源から』坂本比奈子（訳）．井村文化事業社発行．勁草書房販売．）

Thongchai Winichakul. 1994. *Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation*. Honolulu: University of Hawai'i Press.（トンチャイ・ウィニッチャクン．2003.『地図がつくったタイ――国民国家誕生の歴史』石井米雄（訳）．明石書店．）

川中　豪；川村晃一（編著）．『教養の東南アジア現代史』ミネルヴァ書房，2020，xi+360p.

本書は，大学の学部生や社会人などを対象に，東南アジア現代史を多面的に概観したものだが，日本で東南アジアに対する関心と，地域事情を解説した入門書や概説書へのニーズが大きいためか，類書が少なくない。ここ数年に刊行されたものだ